

テルグ語の派生的使役動詞 Morphological Causatives in Telugu

児玉望

Kodama Nozomi

はじめに¹

「使役／非使役」の区別によるとされる対立は、多くの言語においてさまざまな形で表示されることが知られているが、近年の言語類型論研究では、使役 (causative) を、「動詞の持つ項構造の変化を含む文法的手続き (valency changing)」のうち、項増加と「主語」の何らかの「目的語」への降格、という形式的特徴を備えたもの、という枠組みで捉えることが一般化している。たとえば、1b は、1a にはない「使役者 causer」の意味役割を担う項 (太郎) が「ガ」格で追加され、併せて、1a では「ガ」格で表示されていた意味役割を担う項 (花子) が「ヲ」格に降格されている、という点で、1a に対応する使役構造であると見ることができる。

1a: 花子が笑った。

1b: 太郎が花子を笑わせた。

このような枠組みを導入することにより、各言語で使役的機能を担う個別の形態素について、同様の項構造上の特徴をもつ他の形態素も含めたより大きな枠組みの中で、その分布や機能の弁別的な特徴を記述したり、また他の言語と対照したりすることが可能になる。たとえば、日本語において、自動詞「たつ」に使役助動詞が承接した「たたせる」は、「たつ」の他動詞交替形とされる「たてる」と対立しており、日本語の自動詞使役の中で、他動詞化使役構造とは異なる下位範疇として、さまざまな分析が加えられることになる。本稿では、このような類型論的枠組みの観点から、ドラヴィダ語族に属するインドの言語、テルグ語における、使役動詞派生接辞 $-[[i/p]p]inc$ を用いた使役構造について、包括的な記述を試み、また、その特徴を論ずる。

近代言語学におけるインドの諸言語の文法研究においては、インド＝アーリヤ系・ドラヴィダ系といった系統の違いを問わず、動詞の項増加を伴う動詞派生として、「自動詞-

他動詞－使役動詞」の三項対立が注目されてきた。同じ項増加構文でありながら、他動詞／使役動詞の交替は、自動詞／他動詞の交替と原則的に異なる手続きが適用される点が特徴的である。つまり、いわゆる「使役派生接辞」は、他動詞からの使役に限るわけである。これは、使役の一般的な類型からみると、かなり特殊なことである。本稿では、このような用法のテルグ語の使役形態素の多くは、他動詞からの項増加と見るよりは、むしろ、他動詞を派生する使役構造の下位範疇とみなすべきである、ということを示していく。

なお、本稿では、言語学での慣用に従い、causative の訳語として「使役」を用いる。日本語文法における「使役」という術語は、使役者と被使役動作者の関係に焦点を当てたものであり、causative が必ずしも被使役動作者 causee agent の存在を含意せず、他動詞の一部までを含むのと比べると、かなり狭い範囲に適用される印象を与える。しかし、日本語の使役助動詞[s]ase の用法には、許容・放任（「言わせておく」）や、対物動作（「花を咲かせる」）を含んでおり、そもそも術語としての「使役」と、日常語としての「使役」にはずれが生じている。したがって、causer（原因となる人・もの）の存在のみを含意する causative の訳語として「使役」を用い、「他のひとに何か動作をさせる」意味での使役を「狭義の使役」と呼んで区別することにする。実は、テルグ語の使役接辞-[[i/p]p]inc の用法の多くは、この「狭義の使役」を表示しているが、これにおさまらない用法もある。

§ 1. 使役構造

個別の具体的な言語形式によらない使役構造の定義として、本稿では以下のようなものを採用する。

- 1) 非使役構造に規則的に対応させる言語形式（使役形式）が関与する。
- 2) 指示内容として、対応する非使役構造の指示内容が実現することを含意する。
- 3) 2) を何らかの形で可能にした使役者 causer の存在を含意し、主語（相当）名詞句として表示されうる。

たとえば、2, 3, 4 は使役構造であるが、2a, 3a, 4a は使役構造ではない。

2: 太郎が花子を死なせた。

使役形式：助動詞-ase-

非使役構造：花子が死ぬ

使役者：太郎

2a: 太郎が花子を殺した。

使役形式：？

非使役構造：花子が死ぬ

使役者：太郎

3a: 太郎は、(窓を閉めて) 風がはいらないようにした。

使役形式：使役構文 ように・する

非使役構造：風がはいらない

使役者：太郎

3a: 太郎は、風がはいらないようにあれこれ工夫した。

使役形式：ように+動詞句

非使役構造：風がはいらない

使役者：太郎

4: 太郎が窓を閉めた。

使役形式：自他交替 (自動詞接辞-ar-/他動詞接辞-e-)

非使役構造：窓が閉まる

使役者：太郎

4a: 強い風で窓が閉まった。

使役形式：格助詞「で」

非使役構造：窓が閉まる

使役者：強い風

2a は、2 を含意しており、意味は使役構造に近いが、1) にいう規則的な使役形式を欠いている。動詞「殺す」を、語彙的使役動詞と分類する可能性がないわけではないが、本稿では使役構造としては分類しない。3a は、「しかし、うまく行かなかった。」という文を後続させても不適切にならないが、3 は 2) を含意しているので、この連続はおかしいはずである。4a の「強い風」は、使役者であると判断できるが、この文では主語相当句(日本語では通常「ガ」格で表示)として表示されないのが、本稿の使役構造からは除く。4 では、「太郎が」を省略しても使役者の存在が含意されるのに対し、4a では、使役的解釈が「強い風で」の明示的な表示に依存していることにも注意が必要であろう。このほか、

「強風が吹いて窓が閉まった」のような、動詞接続によって特徴付けられる「使役連鎖 causal chain」も同様の理由で使役構造から除外する。

このような定義にあてはまる日本語の使役構造としては、ほかにも以下のようなものがある。

- 5a: 海水を飲めるようにする（機械）。（＜海水が飲める、ように・する）
- 5b: 酒をまずくする（一言）。（＜酒がまずい、連用形「く」・する）
- 5c: 裁判が終わるまで子供を国から出られなくする（命令）。（＜裁判が終わるまで子供が国から出られない、可能動詞否定連用形「なく」・する）
- 5d: 太郎が部屋を綺麗にした。（＜部屋が綺麗だ、連用形「に」・する）
- 5e: 太郎が次郎を助手にした。（＜次郎が助手だ、に・する）
- 5f: 花子が人形に服を着せた。（＜人形が服を着た²、二項他動詞接辞 -se）
- 5g: 太郎が花子に人形に服を着せさせた。（＜花子が人形に服を着せる、使役助動詞 -sase）
- 5h: 太郎が花子に子供の勉強をみてもらった。（＜花子が子供の勉強をみる、て・もらう）

5a は 3 と似ているが、対応する非使役構造の「ガ」格項が「ヲ」格に変わっているという点で異なっている。5a-e はすべて、非使役構造として「なる」に終わる形にも対応するが、「なる」形がすべて「する」の使役形を持つわけではなく、その条件は埋め込み文の種類によって決定されると考えられる。この点を考慮して、両者に共通した埋め込み文を非使役構造として挙げた。

- *6a: 五時にする。（＜五時になる）
- ?*6b: 本を読まなくする。（＜[子供が]本を読まなくなる）

このように一般化してみると、対応する自動詞をもつ他動詞の多くが使役構造に含まれることになる。ただし、すべての他動詞が使役構造とみなされるわけではない。

- 7a: 太郎が太鼓を叩いた。
- 7b: 太郎が花子を呼んだ。
- 7c: 太郎が花子を叩き起こした。（*花子が叩き起きる）

また、自他対応のある他動詞を使う表現でも、必ずしも使役構造ではないことに注意が必要である。8a, 8b では、「ガ」格の)主語項が使役者を指示していないため、使役構造とはみなせない³⁾。また、成句的表現など、自動詞を用いた対応する非使役構造を欠くものも多い。8d が可能な話者にとって、「(写真を)写す」は使役構造ではなく 7a-c に類する対物動作指示の他動詞になっていると考えられる。

8a: 公園の銀杏が葉を落とした。(< (公園の銀杏の) 葉が落ちる)

8b: 太郎が肝をつぶした。(< (太郎の) 肝がつぶれる)

8c: 太郎が執念を燃やしている。(*執念が燃える)

8d: 太郎が写した写真は、写っていなかった。

これらの使役構造は、言語形式として以下のような共通点と相違点を持っている。

<共通点>

- ・ 述語 (通常は用言的活用語) を 2 つもつ複合的な構造である。
- ・ 「ガ」格の使役者項が加わる。(定義による)

<相違点>

- ・ 使役構造に埋め込まれる述語言語形式
 ように・する: 終止形・否定終止形 (時制要素を除く)
 て・もらう: 連用音便形・否定連用形 (ないで)
 (連用形)・する: 形容詞・形容動詞型活用連用形 (可能動詞否定連用形を含む)
 助動詞[s]ase: 動詞未然形 (可能動詞を除く、否定要素・時制要素を含まない)
 他動詞接辞各種: 動詞語根 (複合動詞の一部を含む)
- ・ 埋め込まれる述語を主要部とする「文」が保持する句としての性質
 ように・する(3): 「ガ」格表示の主語を含め、連続した句を構成する。
 その他: 「ガ」格表示の主語を持たない。主語やその他の構成素と用言の間に (本来は句外部の) 使役者項が介在して不連続になりうる。

使役構造は、「使役者の使役行為」と「結果の実現」という二つの指示内容をもつことから、二つの動詞を中心とする節が認められやすいという特徴 (biclausality) をもつ一方で、「使役行為」が、使役者の、結果事象の構成物への直接的な働きかけという側面をもつことにより、二つの節が融合しやすいという特徴 (monoclausality) も認められ、このことに

起因する構文上の特徴の説明には、形式言語学の分野では、関係文法理論の Clause Union 分析や、生成文法理論の Head Movement など、さまざまな理論が適用されてきた。ただし、本稿では、biclausality の現われと見られる構文論上の言語事実とその分析としては、項構造に関する部分（各動詞の格付与能力）以外には立ち入らない。

本稿の枠組みでは、使役構造の monoclausal な性質にのみ注目し、使役構造の複合的な述部が単一の動詞のようにふるまって、単一の動詞に想定されるような「項構造」をもつとみなした場合、それが、対応する非使役構造の述部のもつ「項構造」とどのように異なるか、という観点から使役構造を分析する。このため、biclausal な性質を強く保持し、非使役構造の項構造が埋め込み文の項構造としてそのまま保持される 3 のような使役構造については取り扱わない。ただし、このような biclausal な使役構造に対しても、英語の “have someone do/have something done” のように、埋め込まれた非使役構造がどのような項構造変化を経ているか、という観点からの分析が可能であり、これらも統一的に取り扱えるようなより広い枠組みが求められることを指摘しておく。

§ 2. 項構造変化としての使役構造の類型

使役者項の存在を前提とする使役構造では、対応する非使役文と比べて項が増加するのが普通である。したがって、項減少によって特徴付けられる受動、再帰等の構造と対称的な、文法化された項増加手続きの一つとして使役化を捉える点で、使役構造の類型研究はほぼ一致している。

たとえば、他動詞性 transitivity との関連に着目して項構造変化の類型をまとめた Dixon and Aikhenvald (2000; 6ff) では、自動詞主語 (S) を他動詞目的語 (O) に変え、新たに他動詞主語 (A) を導入する手続きを使役構造と呼び、主として自動詞に対して新たな O を導入する適用構造 applicative と並んで項増加の代表的類型として挙げている。この分析では、自動詞からの他動詞の派生がもっとも普遍的に見られる典型的 prototypical な使役構造とし、他動詞に新たに他動詞主語を導入する使役構造は、言語によっては適用されることもありうる二次的な構造である、とする。これは、本来 O の項が埋まっている他動詞から派生する使役構造において、元の他動詞の A の項をどのように変えるか、という点で、言語によるばらつきが大きいことを考慮したものであろう。

一方、サンスクリット・トルコ語や日本語、ドラヴィダ系のカンナダ語などの言語事実に基づく Comrie (1981) の形態論上の使役の類型は、対応する非使役構造が自動詞であるか他動詞であるかに関係なく、使役者項の導入による構造化がみられることに着目する。

使役者項によって主語項としての地位を失うことになる、非使役構造主語項に対応する項の扱いが、自動詞からの使役構造と他動詞からの使役構造で異なることがありうる、という点については、正面から取り上げて、言語普遍的なハイアラキーを提案する。

9: Comrie のハイアラキー⁴

直接目的語 > 間接目的語 > 斜格目的語

自動詞からの使役構造では、非使役構造主語は直接目的語の地位を占めることができる。しかし、本来の直接目的語をもつ他動詞において、本来の主語項の表示を表示する場合の選択肢は以下の通りである。

9a: 直接目的語 (二重目的語)

9b: 間接目的語

9c: 斜格目的語

このうち、9a が可能なのは、ほとんどすべての場合、単一の動詞の項構造として二重目的語構造が許されている言語だけのオプションであり、一般的には 9b または 9c、つまり、ハイアラキーの左から、すでに埋まっていない項の選択だけが可能である、とする。一つの使役構造において、二つ以上の選択肢がある場合は、日本語の自動詞+[s]ase 使役(「ヲ」格/「ニ」格)や、カンナダ語の他動詞「食べる」からの使役派生(与格/具格)を例に挙げて、意味の違いがあることが多い、とする。

Comrie の分析は、一見日本語の言語事実にあうのだが、主語・直接目的語・間接目的語といった文法関係を言語普遍として立てることの妥当性といった根本的な出発点の違いのほかにも、いくつかの疑問点や、別の解釈の可能性が残る。たとえば、Comrie 自身が認めているように、二重間接目的語の制限は、直接目的語の場合に比べて弱い⁵。日本語の-[s]ase を用いた他動詞派生使役構造では確かに二重「ヲ」格が認められないのであるが、二重の「ニ」格は十分に可能である。

10: 太郎は、花子にわざと次郎に負けさせた。(<花子がわざと次郎に負ける)

10a: 太郎は、花子を次郎に負けさせた。(<花子が次郎に負ける)

10b: 次郎は、花子を負けさせた。(<花子が(次郎に)負ける)

また、他動詞派生の[s]ase 使役構文であっても、「ニ」格による埋め込み文主語表示には、自動詞派生構文の場合と同様の意味的な制限があり、機械的に使役文が派生できるわけではない。

?*11: 太郎は母親に無事を喜ばせた。(＜母親が無事を喜ぶ)

11a: 太郎は母親に無事を喜んでもらった。

*12: 太郎は桜の木に葉を落とさせた。(＜桜の木が葉を落とす)

このことは、日本語の[s]ase 使役に以下の2タイプがあり、両者の間で monoclausality に差がある、ということによっても説明できると思われる。

11a: 「ガ」→「ヲ」格: 自動詞(非他動詞)にのみ適用する派生・項構造変化

11b: 「ガ」→「ニ」格: 埋め込み動詞の主語が動作者である場合にのみ適用。「ニ」格は助動詞[s]ase が付与し、埋め込み動詞の付与する「ニ」格と共存する。

この説明では、11a は Dixon & Aikhenvald (2000) のいう典型的な使役構造の一種、11b は、日本語に特殊な別の使役構造、ということになる。

実は、Comrie (1981) の挙げる説明は、挙げられているカンナダ語の例と同様の交替を含め、テルグ語の使役構造の説明として、日本語の場合と類似の難点を抱えている。本稿では、テルグ語の-[[i/p]p]inc 使役構造の場合も、埋め込み動詞の主語項の格表示に応じた下位分類を適用して、それぞれの使役構造について分析して記述していく、という立場を取る。

§ 3. テルグ語の使役構造⁶

§ 3-1. 形態

テルグ語は、動詞の形態変化によって動詞の項構造変化を表示する言語であることが知られている。語根への接尾辞付加による交替で、自動詞と他動詞の交替では、日本語の自他交替に似て、動詞によってさまざまな形を取る。

12: kāl- 「燃える、焼ける」 > kālc- 「火を付ける」

tīr- 「終わる、決まる」 > tīrc- 「終える、決める」

- dig- 「降りる、下りる」 > dinc-, dimp- 「下ろす」
 āg- 「止まる、やむ」 > āp- 「止める、やめる」
 cāv-/cacc- 「死ぬ」 > camp- 「殺す」
 tirag-/tirig- 「回る」 > tipp- 「回す」
 nilav-/nilic- 「立つ、立ち止まる」 > nilap-/nilip- 「立てる、止める」
 taDav-/taDis- 「溺れる」 > taDap-/taDip- 「溺らす」
 naDav-/naDic- 「歩く」 > naDap-/naDip-, naDipinc- 「駆る」
 ekk- 「乗る、上がる」 > ekk-inc- 「乗せる、持ち上げる」

このほかに、補助動詞を伴う複合動詞形成による他動詞化があるが、この他動詞化も、どのような補助動詞を用いるかが語彙ごとに決定される、不規則な過程である。一方、複合自動詞を形成する paD-/baD- に対しては、規則的に peTT-/beTT- が対応する。

- 13a: pagal-/pagil- 「割れる」 pagala-goTT- 「割る」
 ceD- 「だめになる」 > caDa-goTT- 「だめにする」
 dig- 「降りる」 > diga-beTT- 「降ろす」 (cf. 12)
 kāl- 「燃える、焼ける」 > kāla-beTT- 「燃やす」 (cf. 12)
 13b: nila-baD- 「立つ、止まる」 > nila-beTT- 「立てる、止める」
 kaSTa-paD- 「苦勞する」 > kaSTa-peTT- 「苦勞させる」
 āscarya-paD- 「驚く」 > āscarya-peTT- 「驚かせる」

13a の最後の二例からもわかるように、一つの自動詞に対応する他動詞が複数存在するものもある。

さらに、他動詞は、使役接辞 -[[i/p]p]inc が付いて使役動詞を構成し、自動詞を含めた三項対立を為すものも多い。使役接辞は、他動詞末の接辞や動詞の活用クラスによって、若干の異形態があるものの、ほぼ規則的に付加される。他動詞化の場合と異なり、他動詞からの使役動詞の形成にあずかる接辞は、-[[i/p]p]inc 一種のみである。他動詞のうち、-inc を他動詞化接辞として持つものは、さらに-[[i/p]p]inc が付加されることはなく、他動詞と使役動詞の間の形の区別がない。なお、自動詞に他動詞化接辞として付加される -inc は、他の他動詞化接辞とほぼ相補分布を為していると言ってよく、日本語の「立てる

／立たせる」のような対立は問題にならない。また、同音異義の動詞派生形態素として、主としてサンクスリットからの借用語から自動詞・他動詞を派生する-inc があるが、この接辞に対しては、-[[i/p]p]inc だけでなく、他の他動詞派生接辞も付加されず、テルグ語の項構造交替変化形態論の外にあるとってよい。

14: -[[i/p]p]inc の異形態の分布

[CVn-クラス]	-ipinc-	vin-	「聞く」 > vinipinc-
[/CVcc-]	-ppinc-	ivv-/icc-	「与える」 > ippinc-
[-c-]	-pinc-	kālc-	「火を付ける」 > kālpinc-
[-v/-c-]	-pinc-	nērcu-kun- ⁷	「学ぶ」 > nērpinc- 「学ばせる、教える」
[-D/-c-]	-pinc-	cūD-/cūc-	「見る」 > cūpinc- 「見せる」
[-y/-s-]	-yinc-	mūy-/mūs-	「閉める」 > mūyinc- 「閉じさせる」
[その他]	- inc-	aDag-/aDig-	「頼む」 > aDiginc- 「頼ませる」
		paDa-goTT-	「倒す」 > paDa-goTTinc- 「倒させる」

最後の例で示したように、使役接辞は、複合動詞形式の他動詞にも付加され、かなり生動的に使役動詞が形成されることがわかる。

nērcu-kun- 「学ぶ」は、必ず再帰補助動詞 -kun を伴う他動詞であるが、使役接辞付加にあたっては、再帰接辞は常に落とされる。このことは、使役動詞構造の biclausality を考える上で、重要な特徴である。テルグ語の再帰動詞は、自動詞派生・相互動詞派生などの項減少の項構造変化を含め、自己受益構文など多様な役割をもつが、再帰動詞文内のどこかに主語と同一指示の項があることを示していると考えられる。たとえば、再帰動詞 kaDuk-kun- 「洗う」は、目的語に身体部位があるときに、その身体部位が主語で指示された人物に属していることを示し、非再帰の kaDag-/kaDig-と区別される。これらの動詞の使役動詞形がどちらも kaDiginc-となり区別がないことは、被使役動作者項の主語としての性質が一つ失われることを意味する。一方、使役動詞自身は再帰化される。kaDigincu-kun- 「洗わせる」の場合、目的語の身体部位は、主語である使役者に属することになる。

15a: kāLLu kaDuk-kun- 「自分の足を洗う」

kāLLu kaDag-/kaDig- 「誰かほかの人の足を洗う」

kāLLu kaDiginc- 「(誰かに)(その人の/ほかの人の)足を洗わせる」

kāLLu kaDigincu-kun- 「自分の足を(誰かに)洗ってもらう」

テルグ語には、もうひとつの使役構造として、補助動詞 *-ivv-/-icc-* を用いた、許容・放任構文がある。こちらの構文では、使役構造とは対照的に、再帰動詞を埋め込むことができるものの、複合動詞全体としては再帰化できない。

15b: kāLLu kaDuk-kōn-ivv-/-icc- 「(Xに)Xの足を洗わせてやる」

kāLLu kaDagan-ivv-/-icc- 「(Xに)X以外の人の足を洗わせてやる」

*kāLLu kaDuk-kōn-iccu-kun-

*kāLLu kaDagan-iccu-kun-

§ 3-2. 項構造

§ 3-2-0. 「被使役動作者」項

テルグ語文法に限らず、近代のインド諸言語研究では、インド諸言語の使役動詞派生に格別の注意を払ってきた。使役動詞を用いた使役構造の意味は、使役者が、直接働きかけるのではなく、通常は誰か他人を通じて、目的語に働きかける、というものであるとされ、causative のほかに、mediative (Emeneau 1971)⁸、また、他動詞構造の causative に対して、indirect causative (Masica 1991:319) のような用語が使用される場合もある。Krishnamurti (1971)は、動作主 Agent が一項の他動詞と区別するために、動作主が二項の動詞のみを causative と呼ぶべきであると提案した。まさに、日本語の(狭義の)「使役」に相当する意味に焦点が当てられたわけである。

しかし、Krishnamurti (1961)によれば、テルグ語伝統文法では使役動詞と他動詞を区別せずに *prēraNārthaka* 「誘因」という用語を適用していた。これはおそらく、項構造変化の観点からは、被使役動作者が、具格(テルグ語の場合は、後置詞 *cēta* を伴う名詞句⁹)の形で表されうる、という以外は、他動詞と特別の違いがないと考えたためであろう。実は、狭義の使役としての用法において日本語の使役ともっとも異なると考えられる点は、この、被使役動作者の表示が必須ではない、という点である。

16a: rāmuDu juTTu kattera=vēy-incu-kon-nāDu.

ラーム 髪 鋏で切る-使役-再帰-3人称男性単数過去

「ラーム₁は、自分₁の髪を刈らせた。=散髪した」

16b: rāmuDu juTTu kattera=vēsu-kon-nāDu.

ラーム 髪 鋏で切る-再帰-3人称男性単数過去

「ラーム₁は、自分₁の髪を（自分で）刈った。」

16c: rāmuDu kamala-cēta juTTu kattera=vēy-inci-āDu.

ラーム カマラ-具格 髪 鋏で切る-使役-3人称男性単数過去

「ラーム₁は、カマラに（誰か₁）の髪を刈らせた。」

16d: rāmuDu kamala juTTu kattera=vēsi-āDu.

ラーム カマラ 髪 鋏で切る-3人称男性単数過去

「ラームは、カマラの髪を刈った。」

16a は、床屋で散髪した場合に普通の表現である。動詞が再帰動詞化されているため、「髪」はラーム自身の髪であることが明示される。16b のように使役接辞を落とすと、自分で直接髪を切った、という解釈だけが可能になる。16c では、被使役動作者（カマラ）が明示されているが、動詞が再帰動詞でないため、「髪」はラームの髪という解釈にはならない。しかし、再帰動詞のみに対応する使役構造が存在せず、使役接辞の前では動詞の再帰/非再帰の対立が中和されるため、16c は、カマラがカマラ自身の髪を切った、という解釈は可能であり、ほかに文脈がない限り、これがもっとも自然な解釈となる。要は、ラームが切ったわけではない、という点である。使役も再帰もない16dでは、ラームが直接手を下してその結果カマラの髪が切られた、ということになる。

16a の日本語の訳文が、日本語として奇妙であるのは、使役助動詞を使用しているのに、被使役動作者が明示されていないためであろう。さらにいえば、日本語の訳文での「自分」は、ラームという解釈のほかに、被使役動作者自身、という解釈も可能である。日本語では、被使役動作者を特定して伝えようとしない場合には、そもそも使役構造ではなく通常他動詞構造を用いてよいから、後者の場合には実は、実際に髪を切る動作を行なったのが誰かもわからないのである。

16e: ラームは（カマラに）（ラームのではなく）自分の髪を刈らせた。

16f: ラームは床屋で髪を刈った。

このように、テルグ語の -[[i/p]p] inc 使役動詞構文では、被使役動作者は明示されな

くても常に了解されており、この点だけですでに、通常他動詞と区別されているのである。使役動詞構文を、他動詞構文に対応する使役構造とみなしうるとすれば、他動詞構文の主語項が、具格項、つまり、Comrieの類型によれば、任意成分の斜格項まで降格された項構造変化を経ていることになるが、いくつかの問題点がある。

ひとつは、対応する非使役構造に存在しない項が、-[[i/p]p]inc 付加に伴なって具格項として出現することがありうる、という点である。たとえば、自動詞 rā-/vacc- 「来る」に対応する他動詞形は、-[[i/p]p]inc-を用いる rappinc- であるが、この動詞は、単に「来させる」という抽象的な意味ではなく、「人をやって連れてくる」なり「電報を送って呼ぶ」なりの間接的な働きかけがある場合でなければ用いられない。この場合、対応する自動詞には存在しない「使いのもの」が、任意項としてではあるが、具格で出現することになる。

- 17: rāmuDu kamala-cēta DākTargār-ni ra-ppinci-āDu.
 ラーム カマラ-具格 医者-対格 来る-使役-3人称男性単数過去
 「ラームは、カマラを遣って医者を連れてこさせた。」

また、具格項で表わされるべき被使役動作者が存在しないにもかかわらず、主語が直接手を下していないために、使役動詞を使わなければならない、という場合もある。

- 18a: rāmuDu inDiyā-nunci kamala-ku vakkalu te-ppinci-āDu.
 ラーム インド-奪格 カマラ-与格 アレカ もたらず-使役-3人称男性単数過去
 「ラームはインドからアレカの実をもってこさせて、カマラに与えた。」

- 18b: rāmuDu indiyā-nunci vakkalu te-ppincu-kun-nāDu.
 ラーム インド-奪格 アレカ もたらず-使役-再帰-3人称男性単数過去
 「ラームはインドからアレカの実をもってこさせた。=取り寄せた。」

- 18c: rāmuDu kamala-ku kōpam te-ppinci-āDu.
 ラーム カマラ-与格 怒り もたらず-使役-3人称男性単数過去
 「ラームはカマラに怒りをもたらしした。=怒らせた。」

18の teppinc-は、動詞 tē-/tecc- 「持ってくる」の使役動詞形である。18cで使役動詞形が用いられるのは、「怒り」を主語が直接持ち運ぶことができないためである。が、だからと言って、実際に持ってきた被使役動作者が存在しているわけではない。与格項は、動

詞 *tē-/tecc-* が本来持っている帰着点項であって、この構文では被使役動作者と解釈することには無理であるように見える。実は、18c の構文は、二項他動詞という別のタイプの使役構造を派生する、*-[[i/p]p] inc-* のもうひとつの機能の例とみられることを § 3-2-2 で論じるのであるが、このような派生的な二項他動詞は、新たに *-[[i/p]p] inc-* を付加することなく、狭義の使役にも用いられる。

以上のように、他動詞派生の使役動詞を用いた構文で現われる斜格の被使役動作者項を、対応する他動詞の非使役構造の主語項に結び付け、かつ、この構造に対応する使役構造として使役動詞構文を分析することが常に可能ではないことを示した。しかし、テルグ語の使役動詞構文の中には、被使役動作者項を斜格以外の格、具体的には対格と与格で表示する場合がある。以下では、これらを通常の狭義の使役を表わす使役動詞構文と区別して、別の構文として分析し、その特徴を明らかにする。

§ 3-2-1. 対格支配の使役構造

対格言語であるテルグ語は、他動詞の目的語表示の格として対格を用いる。無生物の場合は、対格のかわりに主格形を用いることも多いが、有生の指示物をもつ目的語名詞句は対格表示が義務的である。したがって、自動詞から派生した他動詞の場合には、自動詞の主格の主語項に対応する意味役割をもつ項が対格表示となる。これは、*-[[i/p]p] inc* により派生した他動詞の場合でも同じである。

19a: *rāmuDu kamala-nu navv-inci-āDu.* < *navvi-ndi* (笑う-女性単数過去)

ラーム カマラ-対格 笑う-使役-3人称男性単数過去

「ラームがカマラを笑わせた。」

19b: *rāmuDu kamala-nu ēD-pinci-āDu.* < *ēDci-ndi*

ラーム カマラ-対格 笑う-使役-3人称男性単数過去

「ラームがカマラを笑わせた。」

19c: *rāmuDu kāru naD-ipinci-āDu.* < *naDici-ndi*

ラーム 車 歩く・進む-使役-3人称男性単数過去

「ラームが車を走らせた。」

有生の主語と同族目的語を取りうる動詞の使役動詞形では、他動詞派生動詞の扱いとなつて、主語項に対応する有生の名詞句が具格で表されることもあるが、この場合でも、目

的語が省略されると、通常の自動詞派生の他動詞と同様に、実際の動作者が対格で現される動詞もある。

20a: rāmuDu kamala-cēta pāTa-lu pād-incī-āDu. < pāDi-ndi
 ラーム カマラ-具格 歌-複数 歌う-使役-3人称男性単数過去
 「ラームがカマラに歌を歌わせた。」

20b: rāmuDu kamala-cēta āTa-lu āD-incī-āDu. < āDi-ndi
 ラーム カマラ-具格 遊び-複数 遊ぶ-使役-3人称男性単数過去
 「ラームがカマラにゲームをやらせた。」

21a: rāmuDu kamala-cēta pād-incī-āDu.
 ラーム カマラ-具格 歌う-使役-3人称男性単数過去
 「ラームがカマラに／を歌わせた。」

21b: rāmuDu kamala-nu āD-incī-āDu.
 ラーム カマラ-対格 遊ぶ-使役-3人称男性単数過去
 「ラームがカマラをあやした。」

21bの āD-inc- に対応する āD-は、無生物主語の自動詞として、「振れる」「動く」などの用法を数多くもっており、これに対応する āD-inc-は、常に他動詞となる (tala 「頭」、tōka 「尾」など)。また、生物主語であっても、21b のような、幼児や、動物 (pāmu-lu 「蛇」 kōtu-lu 「猿」 bomma-lu 「人形」) に対する場合のように、目的語に応じた使役動作が決まっている場合にも、具格で被動作者扱いにすることはありえない。

以上のように、-[i/p]inc を付加した動詞が1個の対格名詞句のみを支配し、具格項をとらない場合は、事実上は通常の他動詞と同じである。ただし、これらの動詞は、対応する使役動詞との形式上の区別がないため、具格項が明示されなければ、直接動作による使役であるか、媒介者を経ての行動であるのかの区別はつけられない。

22a: rāmuDu nā-cēta kāru naD-ipinci-āDu.
 ラーム 私-具格 車 歩く・進む-使役-3人称男性単数過去
 「ラームが私に車を運転させた。」

22b: rāmuDu nā-cēta kamala-nu āD-incī-āDu.
 ラーム 私-具格 カマラ-対格 遊ぶ-使役-3人称男性単数過去

「ラームが私にカマラをあやさせた。」

一方、他動詞に-[[i/p]p]incを付加する本来の使役動詞でも、被使役動作者が対格で表示される場合がある。この結果、使役動詞は二重に対格目的語を持つことになる。いくつかの例を挙げる。

- 23a: rāmuDu na-nnu maDDiniLLu tāg-inci-āDu. < tāgi-ānu (飲む—一人称過去)
 ラーム 私-対格 泥水 飲む-使役-3人称男性単数過去
 「ラームが私に泥水を飲ませた。」
- 23b: rāmuDu na-nnu tappudōva paTT-inci-āDu. < paTTi-ānu
 ラーム 私-対格 間違った道 攪む-使役-3人称男性単数過去
 「ラームが私に道を誤らせた。」
- 23c: rāmuDu kamala-nu pani mān-ipinci-āDu. < mān(ēs)i-ndi
 ラーム カマラ-対格 仕事 やめる-使役-3人称男性単数過去
 「ラームがカマラに仕事をやめさせた。」
- 23d: rāmuDu atithu-la-nu tīpi tin-ipinci-āDu. < tin-nāru
 ラーム 客-複数-対格 菓子 食べる-使役-3人称男性単数過去
 「ラームが客たちに甘いものをふるまった。」

このような構文が可能な動詞は、比較的限られているようである。23aは、比喩的な表現であり、目的語にはほかのヴァリエーションもあるが、たとえばbiru「ビール」のような一般的な名詞を目的語とする具体的な動作にも適用できる。この場合、被使役動作者を具格で表すより無理強いした、というニュアンスが強く出る。目的語が1人称であれば、日本語の「飲まされた」に近い用法になろう。ただし、23c, 23dの場合のように、3人称の目的語であってもこの構文は可能である。

上の4つの例に共通するのは、使役されている動作が、典型的な他動詞というよりは、再帰的な意味を強く持ち、動作の結果が動作者に及ぶものである、という点である。したがって、これらの動詞は、意味の焦点次第では、いわば「対格目的語をとる自動詞」ともみなすことができる。実際、このような他動詞の中で、不特定な対格目的語を落として、やや意味の特殊化した自動詞的構文となり、使役動詞が対格をとるものもある。

- 24a: rāmuDu kamala-nu cadiv-inci-āDu. < cadivi-ndi

ラーム カマラ-対格 読む-使役-3人称男性単数過去

「ラームがカマラに教育を受けさせた。」

24b: rāmuḍu kamala-cēta pāThā-lu cadiv-incī-āḍu.

ラーム カマラ-具格 書物-複数 読む-使役-3人称男性単数過去

「ラームがカマラに勉強させた。」

ただし、15a, 16a-d に見たように、複合的な再帰他動詞の使役動詞化では、非再帰の動詞との使役動詞の形態による区別がないが、被使役動作者の格表示によって被使役動作の内容が再帰的かどうかを決定できる、というようなことはいえない。使役構造の対格支配の条件と、再帰性の関与に関しては、さらに詳しい研究が待たれる。

テルグ語の二重対格使役は、「ほとんどすべての場合、単一の動詞の項構造として二重目的語構造が許されている言語だけが二重対格使役をもつ」¹⁰とする Comrie の使役類型論にとって稀な例外の一つとなっている。テルグ語の通常の動詞の項構造では、二重対格が許容されないからである。ほかにも二重対格を許す構文は二つある。ひとつは、15b に示した許容・放任構文で、これは別の使役構造である。もうひとつは、命令引用構文で、この構文は、使役内容の実現を含意しないという点で使役構造とは言えないが、その他の点では擬似使役構文ともいうべきものである。¹¹

25a: rāmuḍu kamala-nu pāThā-lu cadavan-icci-āḍu.

ラーム カマラ-具格 書物-複数 読む-与える-3人称男性単数過去

「ラームがカマラに勉強することを許した。」

25b: rāmuḍu kamala-nu pāThā-lu cadavam-an-nāḍu.

ラーム カマラ-具格 書物-複数 読む-言う-3人称男性単数過去

「ラームがカマラに勉強するように言った。」

いずれも、埋め込まれる動詞句の種類に関わらず、被使役動作者を対格で表示するきわめて生産的な構文である。これらの構文は、語順の点で monoclausal に見えるものの、全体としては biclausal な性質を強く残しており、被使役動作者の対格表示と、埋め込まれた目的語の対格表示が共存することもこれらの動詞の biclausality の一つの証拠とみなすことができる。

これに対して、-[i/p] inc 付加による使役動詞での二重対格が、果たして同様な

biclausality に帰せられるかどうかは、その成立条件とともに、今の段階では確定できない。三つの構文に共通しているのは、テルグ語の通常の他動詞派生使役構文において随意要素としてしか表現されない被使役動作者が、意味的に必須である、という点である。再帰的な行為は、目的語の所属や帰着点を表す名詞句が了解されていなければならないし、許容構文と命令文も、対象が特定されていなければならない。受動構文や目的語活用のような、「直接目的語」の定義に関わる言語事実を欠くテルグ語では、これらの対格名詞句を直接目的語であると断定する根拠がないが、意味の点ではこのような共通の要素を認めることができる。

§ 3-2-2. 与格支配の使役構造

Comrie は、日本語自動詞からの [s]ase 使役におけるの「ニ」/「ヲ」格表示に類する、他動詞派生の使役動詞での被使役動作者の格表示による意味の違いを、カンナダ語の tinisu 「食べさせる」での与格と具格の交替の例で示している¹²。親縁関係のあるテルグ語の tin-ipinc- でも、同様の交替がある。

- 26a: rāmuDu kamala-ku dōse tin-ipinci-āDu. < tin-di
 ラーム カマラ-与格 ドーセ 食べる-使役-3人称男性単数過去
 「ラームがカマラに（手ずから）ご飯を食べさせた。」
- 26b: rāmuDu kamala-cēta dōse tin-ipinci-āDu.
 ラーム カマラ-具格 ドーセ 食べる-使役-3人称男性単数過去
 「ラームがカマラにドーセを食べさせた。」

動作に対する制御 control の弱い被使役動作者が与格、という Comrie の説明は、この場合にもあてはまる。しかし、このような与格被使役動作者が現われることのできる使役動詞は、他動詞の一部から派生したものに限られている。

- 27a: tin-ipinc- < tin- 「食べる」
 tāg-inc- < tāg- 「飲む」
 cūp-inc- < cūD-/cūc- 「見る」
 vin-ipinc- < vin- 「聞く」
 cadiv-inc- < cadav-/cadiv- 「読む」

- 27b: nēr-pinc- < nērcu-kun- 「学ぶ」
 toDig-inc- < toDuk-kun- 「着る」「履く」「装う」
 telip-inc- < telusu-kun- 「知る」(状態変化)
 an-ipinc- < anu-kun- 「思う」
 tapp-inc- < tappu-kun- 「逃れる」
 te-ppinc- < teccu-kun- 「(自分のところに)もってくる」

対応する非使役動詞は、再帰的な意味をもつか、あるいは、再帰補助動詞によって形態論上明示的に示された再帰動詞である。

18c の kōpam te-ppinc- に対応する非使役構造は、28 になる。

- 28: kamala kōpam teccu-kun-di.
 カマラ 怒り もたらず-再帰-3人称単数女性過去
 「カマラが腹を立てた。」

いわば、これらの動詞は、動作者の行為の効果が動作者自身ではなく、与格項の指示する経験者に現われることを明示的に示す、反再帰動詞とでもいうべき性格をもっている。日本語の「着る／着せる」、「見る／見せる」、「かぶる／かぶせる」、「浴びる／浴びせる」とよく似た関係にあるわけである。本稿では、これらの動詞も使役構造の下位グループとみなす定義を採用している。

日本語の「着せる」などが、使役動詞ではなく二項他動詞と扱われるように、テルグ語の与格支配の使役動詞も、狭義の使役動詞とは異なる二項他動詞として扱われるべきであろう。日本語で二項他動詞が狭義の使役動詞と区別されるべきひとつの大きな根拠は、二項他動詞はそれ自身、使役化が可能であることであるが、テルグ語の二項他動詞でも同じである。反再帰動詞の場合、形態論上はこれ以上の派生ができないが、統語的には具格項で被使役動作者を追加することができる。

- 29a: rāmuDu nā-cēta kamala-ku appu i-ppinci-āDu. < icci-ānu 「与える」
 ラーム 私-具格 カマラ-与格 つけ 与える-使役-3人称男性単数過去
 「ラームが私にカマラに対して掛売りさせた。」
 29b: rāmuDu nā-cēta kamala-ku dōse tin-ipinci-āDu.

ラーム 私-具格 カマラ-与格 ドーセ 食べる-使役-3人称男性単数過去
 「ラームが私を使ってカマラにドーセを食べさせた。」

もうひとつは、再帰化の特徴である。テルグ語の補助動詞-kun-の付加された再帰動詞は、動詞句内の、動詞によって異なるいずれかの位置に、主語と同一指示の項があることを示している¹³が、二項他動詞の再帰動詞の場合は、与格項がこの位置で、同一指示の与格項が削除される項減少の変換として再帰化が機能する。28の例でも、非再帰の tecc- 「もたらす」の与格項がなくなって、kōpam 「怒り」の帰着点の主語であることが示されている。-[i/p]p inc の付された反再帰動詞や二項他動詞の使役形でも、同じような再帰構造が頻繁に用いられる。

- 30a: kamala rāmuDi-cēta dōse tin-ipincu-kun-di.
 カマラ ラーム-具格 ドーセ 食べる-使役-再帰-3人称単数女性過去
 「カマラがラームにドーセを食べさせてもらった。」¹⁴
- 30b: kamala rāmuDi-cēta appu i-ppincu-kun-di.
 カマラ ラーム-具格 つけ 与える-使役-再帰-3人称単数女性過去
 「カマラがラームにつけにしてもらった。」
- 30c: kamala rāmuDi-cēta uttaram cadiv-incu-kun-di.
 カマラ ラーム-具格 手紙 読んで-使役-再帰-3人称単数女性過去
 「カマラがラームに手紙を読み上げてもらった。」

28との違いは、反再帰動詞の場合には、随意的に具格の被使役動作者を持つことができる、という点である。この被使役動作者は、26a と 30a を比べればわかるように、対応する非再帰の非使役文では主語項に対応しており、他方、非再帰の（狭義の）使役文 29b との対応でいえば、主語項（使役者）と具格項（被使役動作者）のいずれに対応するかを問わない。要は、反再帰動詞の再帰文では主格項が自ら動作していない、ということにのみ焦点がある。この点は、次の 31 の例がもっとも的確に示している。31 で否定されているのは、「カマラが聞く」という結果のほうであって、「聞かせる」という原因となる使役の動作そのものではない。「カマラの耳に入れる」という外からの働きかけそのものは、使役接辞の使用によって含意されている。

- 31: evaru aDig-inā kamala vin-ipincu-kō-du.
 誰 頼む-でも カマラ 聞く-使役-再帰-3人称単数女性否定
 「誰が頼んでもカマラは聞き入れない。」

30a-cのような、使役受動的な再帰動詞の用法は、-[i/p]p inc を用いる使役動詞では、与格支配が可能な反再帰動詞に特有のものである。たとえば、30c は、カマラが非再帰の使役文の被使役動作者に対応するような「手紙を読ませてもらう」の意味には決してならない。言い換えれば、被使役動作者であれ何であれ、具格項が主語に繰り上がるような再帰化は、テルグ語の場合には起こりえないのである。

興味深いのは、通常他動詞の再帰化でしばしば見られる、直接目的語の主語への繰上げと、それに伴う項減少が、二項他動詞の場合には、再帰補助動詞の付加を経ない、という点である。動詞の形はそのまま、項数だけが一方的に減る動詞があるのである。「見る」「聞く」「思う」などの知覚・感覚を表わす動詞に限られ、結果は、知覚・感覚の経験者を指示する与格名詞句と、知覚・感覚の対象を表わす主格名詞句または節の二項をもつ自動詞となる。

- 32a: kamala-ki rāmuḍ-i gontu vin-ipinci-ndi.
 カマラ-与格 ラーム-の 声 聞く-使役-3人称中性単数過去
 「カマラにはラームの声が聞こえた。」
- 32b: kamala-ku cālā kaSTam an-ipinci-ndi.
 カマラ-与格 大変な 困難 思う-使役-3人称中性単数過去
 「カマラにはひどくつらく思えた。」

32のタイプの、与格経験者項をもつ自動詞構文は、テルグ語ではさまざまな二項関係に適用され、使役動詞を用いないものも数多く見られる。ややこしいのは、32の場合と逆に、これらの自動詞が対応する使役構造をもつ場合にも、-[i/p]p inc 付加による他動詞化が適用されることである。通常使役者項が主語として追加され、元の主語が対格に降格するという通常の項変化に、本来の与格がそのまま残るため、結果として二項他動詞が派生することになる。

- 33a: kamala-ku picci paTTi-ndi.

カマラ-与格 狂気 憑く-3人称中性単数過去

「カマラが(何かに)狂った。」

33b: rāmuDu kamala-ku ā picci paTT-inci-āDu.

ラーム カマラ-与格 その 狂気 憑く-使役-3人称中性単数過去

「ラームがカマラをその何かに狂わせた。」

34a: kamala-ku bassu tappi-ndi.

カマラ-与格 バス 逃す-3人称中性単数過去

「カマラがバスに乗り遅れた。」

34b: rāmuDu kamala-ku bassu tapp-inci-āDu.

ラーム カマラ-与格 バス 逃す-使役-3人称中性単数過去

「ラームがカマラをバスに乗り遅れさせた。」

このような動詞では、32の場合とは異なり、二項他動詞と対応する自動詞で動詞の形が違っている。さらに、このような二項動詞から、また新たな動詞が派生する。35a は再帰化を伴わない項減少、35b は再帰化を伴う項減少の例である。

35a: kamala-ku ā ceppu-lu paTT-inci-āyi.

カマラ-与格 その靴-複数 憑く-使役-3人称中性複数過去

「カマラは、その靴が足に合わなかった。」

35b: kamala rāmuN-Ni tapp-incu-kun-di.

カマラ ラーム-対格 逃す-使役-再帰-3人称女性単数過去

「カマラはラームを避けた。」

こうなってくると-[[i/p]p]inc は、もはや使役構造とはほとんど関係のない単なる動詞の派生要素として機能しているようにも思われる。たとえば、35b は、形の上では 30a-c や 31 と同様な使役動詞の再帰化であるが、共通しているのは、対応する二項他動詞の与格項が主語に繰り上がっている、という点だけで、もはや第三者の行動が介入しているという解釈はできない。

以上で取り上げた与格項を含む動詞の項構造は、以下のような3種類に分類できる。二項他動詞を基本として、残りの2個は、動作主項を削除し、残りの2項のうちのいずれかが主語となっているもの、という対応になる。本節で取り上げた項構造変化の過程は、す

べてこれらの3つの間での構造転換に関するものであった。

36: 与格項を含む項構造の類型

A: 二項他動詞

主格: 動作者 与格: 経験者・帰着点 対格: 対象

B: 再帰的他動詞

主格: 経験者・帰着点 (+制御) 対格: 対象

C: 経験者項付き自動詞

主格: 対象 与格: 経験者・帰着点 (-制御)

37: 項構造変化

[A>A: 二項動詞狭義の使役化 (なければ-[[i/p]p] inc 付加)]

A>B: 再帰他動詞化 (補助動詞 -kun 付加)

B>A: 反再帰化 (-kun があれば削除及び-[[i/p]p] inc 付加)

A>C: 自動詞化 (不変化)

C>A: 他動詞化 (-[[i/p]p] inc 付加)

BとCとの間には直接の関係はないように思われるが、telus- 「知る」のように、C>Bの転換に補助動詞 -kun 付加を充てる動詞もある。38に見るように、同じ形態の構造であっても、派生の原点がどこにあるかによって、項構造が異なる。BとCの関係が特殊なtelus- 「知る」の派生関係では、Aの形がBからの派生ともCからの派生とも解釈できるようになっているが、これは例外的で、通常はどちらかが一意的に判定できる。

38: 項構造変化を適用した派生

「知る」C: telus- C>B: telusu-kun-, B> または C>A telip-inc-

「逃がす」C: tapp- C>A tapp-inc- A>B tapp-incu-kun

「憑く」C: paTT- C>A paTT-inc- A>C paTT-inc-

「聞く」B: vin- B>A: vin-ipinc- A>C¹⁶: vin-ipinc- A>B vin-ipinc-kun-

「もたらす」A: tecc- A>B: teccu-kun- B>A: te-ppinc- A>B te-ppinc-kun-

「怒る」対格 kōpam (C: rā/vacc- 「来る」) B: teccu-kun- B>A: tepp-inc-

実は、Cのパターンを基本とした動詞の多くは、与格項をもたない単純な他動詞や自動

詞としての用法をも持っていて、項構造に応じて異なる意味をもつものも多い¹⁵。これらから派生する使役動詞や再帰動詞を合せると、もっと複雑な項構造パターンが同じ形態素の組み合わせに対して共存することになるのであるが、本稿ではそこまでは立ち入らない。はっきりと言えることは、-[[i/p]p]inc の付加にしても補助動詞-kun の付加にしても、その適用・不適用は、語彙ごとに決定される派生パターンだということである。-[[i/p]p]inc 付加の起きた動詞は二項他動詞である、ということはいえるが、その特徴である与格項にしても、B からの派生では主語に対応し、C からの派生では本来の与格項に対応するわけであるから、一律には扱えない。B と C のいずれの構造にも欠けている動作者項が A で加わる、という一点のみが、共通点である。そしてこれは、§ 3-1-1 で扱った、対格支配の使役動詞の派生の場合とも共通する、他動詞化、つまり、広い意味での使役構造の特徴であるといえる。

§ 4. 結論

本稿では、テルグ語の動詞派生接辞-[[i/p]p]inc を含む、いわゆる使役動詞が持ちうる項構造のヴァリエーションを概観した。これらを整理してみると、-[[i/p]p]inc は 2 種類に大別できることがわかる。使役動作者項を主語として追加するタイプと、すでに使役動作者項をもつ動詞（派生他動詞）について、使役動作者の行なう動作が間接的なものであることを示すタイプである。前者は、本稿で採用した使役構造の基本的な定義に合致しているが、しばしば使役構造の類型論で問題にされる「被使役動作者」が原則として存在しないように見える。後者は、すでに使役構造が存在している動詞について、意味を限定させているだけである以上、項構造変化としての使役化に関与しているとはいえないが、一方で、その限定する意味は、「被使役動作者」が存在すること、であるから、まさに「使役」の名にふさわしい変化であると言える。いずれにしても、動詞の項構造変化の問題と、被使役動作者やその種類（能動性等）の問題は、実は独立して取り扱われるべきである、ということを示唆する結果であるように思われる。

項構造変化を引き起こす使役動詞派生過程は以下の通りである。

- (1) 一項自動詞→他動詞 (§ 3-2-1)
- (2) 再帰的他動詞→二重対格他動詞 (§ 3-2-1)
- (3) 再帰的他動詞→二項他動詞 (反再帰化 § 3-2-2)
- (4) 与格経験者項付き自動詞→二項他動詞 (§ 3-2-2)

ただし、(2) の条件については、その統語構造も含め、さらに明らかにすべき点が多い。

過程(1)においては-[[i/p]p]incは競合する多くの接辞の中のひとつとして一部の動詞に対して選択的に付加されるに過ぎないが、過程(2)、(3)、(4)ではすべて((i)p)inc付加のみが適用しうる接辞付加である。過程(1)、(2)、(4)においては、対応する非使役構造の主語が、使役構造では対格に降格するのに対し、過程(3)においては、与格に降格する。いずれの場合もこれらの名詞句の意味役割には使役動詞化によって大きな変更はないが、有生主語をもつ場合、つまり過程(2)・(3)のすべて及び過程(1)・(4)の一部では、動作者性があるという解釈の余地がなくなる。

二項他動詞を派生する過程(3)と過程(4)は、それぞれ逆向きの派生過程と共存している。再帰動詞化を含むこれらの項構造増減の派生の分布は、派生類型論の観点からも興味深い。たとえば、日本語の「着る>着せる」や「見る>見せる」などは過程(3)に分類できようが、過程(4)に相当する派生は、「わかる>わからせる」のように、過程(3)が並行的に仮定できる場合や、「ニ」格が場所格の場合以外は稀である。逆に、日本語では「見る>見える」や「聞く>聞こえる」のように、テルグ語にはない再帰的他動詞からの与格経験者項付き自動詞の派生が観察される。

一方、項構造変化を引き起こさない意味的な(狭義の)使役化では、にもかかわらず随意項として「被使役動作者」を表示する具格項が明示される場合がある。上記1-4の結果として生じた使役動詞が使役化する場合は、動詞形態が変化しないため、これらの具格項が了解されていることが狭義の使役化としての解釈の条件となる。

本稿で取り扱わなかった問題をいくつか列挙しておく。ひとつは、他動詞化や狭義の使役化がどのような動詞に適用されるのか、あるいはその中に下位分類はないのか、という問題である。他動詞化の接辞がさまざまであることはすでに述べたが、-[[i/p]p]incを用いて他動詞化する動詞には、「泣く」「笑う」「遊ぶ」など、人間の動作に対応する使役構造を作る動詞が多い。典型的な派生他動詞でいう「結果の実現」とは「もの」の状態変化の完了であるのに対し、これらの動詞では動作の開始である、というアスペクト的な違いが動詞形態などの違いに反映されている可能性がある。他動詞化を「状態の変化」として説明しようとするKrishnamurti(1971)は、この点で示唆的な研究であるといえる¹⁷。狭義の使役化を、他動詞化の下位分類として取り扱うことの一つの問題点は、派生的でない本来の他動詞であっても使役化するものがあることをどうやって説明するか、という点である。これらの動詞は意味的に使役構造をもつ動詞だからだ、という仮説は可能であろうが、その前に、使役化しない動詞や、使役化の前後でアスペクト変化が生じる動詞はないか、という点にも注意が必要であろう。

もうひとつは、再帰的他動詞の下位分類である。反再帰的な二項他動詞を派生できる再帰動詞は比較的数が限られているし、また、二重対格が可能な再帰動詞はさらに少ないように思われる。これらのグループは、重なりはあるものの、一方が他方を包含するというような関係ではない。これらの条件や、両方が可能な場合の意味の区別に一貫性があるか、といった問題も未解決である。

テルグ語の動詞構造の大きな特徴は、動詞の形態構成から、その項構造などの統語的範疇がすぐにはわからない、という点である。形態分析だけでは、形と意味の対応の不一致ばかりが目につくのである。-[i/p]inc を使役形態素としてのみ分析する記述では、このような不一致に目をつぶり、ともすれば記述が断片的になりがちであった。本稿の結論は-[i/p]inc などの使役形態素は、語彙派生過程と項構造変化に対応する、と考えれば、ある程度すっきりした記述が可能である、ということでもある。

このような語彙派生過程は、多くの言語に見られるような、構文論的な使役構造形成と異なり、その適用の有無が語彙的にしか決定できないものである。この点を踏まえて、これらの派生情報に関しての情報を加えた語彙データベースを充実させることがテルグ語学の大きな課題であるといえるだろう。

注

1. 本稿は、1995-1996年、在外研究員として滞在したインド・ハイダラーバードにおける現地調査の資料に基づいている。助言と批判をいただいた、ハイダラーバード大学応用言語学翻訳理論研究所の Garapati Umamaheshwarrao 氏、同大学名誉教授 Bhadriraju Krishnamurti 博士に謝意を表したい。
2. 「人形が服を着ているのは、自分で着たのではなく、花子が着せたからだ」というような文脈で、「服を着た人形」は自然な日本語であると判断する。
3. 8a-b を本稿では、動詞の指示するできごとの効果が主語に及ぶ、という意味で再帰的他動詞と呼ぶ。8b では、「太郎」が動作主として解釈されると、「肝」が太郎のものという読みが失われ、再帰的でない解釈となっている。
4. Comrie 1981: 169ff.
5. Comrie 1981: 171ff.
6. テルグ語音韻の表記は、Indian Linguistics 誌で採用されているものに準じ、反舌子音記号として T, Th, D, Dh, N, L, S を用いる。長母音は、区別符号で表示し、外来語などで用いられ音素として扱われることのある [æ:] については、環境に応じ /i-a/, /ya/, /e/ として表記した。テルグ語動詞は、いわゆる citation form が必ずしも活用型の異なる動詞を弁別しないことを考慮し、不定詞接辞 (-a[n]) の前の語幹を原則とし、副詞的完了分詞 (-i) の前の語幹形がこれと異なる場合は "/" の後に付記する。
7. kun- < kon- 「取る」。副詞的完了分詞に後続する複合動詞構文であるが、現代テルグ語では母音調和を起こして自らも前分の動詞も独特の形をとっており、かつ活用形も特殊であるため、形態論的には派生接辞とも分析できる。
8. Dil (1980: 172). Emeneau は、mediative をインドアーリヤ系の三項対立システムと区別するために使用し、ここで自動詞の mediative と他動詞とを、ドラヴィダ系言語では、言語によっては対立があり四項対立を可能にする区別だとしている。テルグ語の自動詞の使役構造では、この区別は動詞によって選択されるものであってひとつの動詞について対立がある語彙は見出されないと考えられる。ra-/vacc- > ra-ppinc- のような場合 (例文 17 参照) が自動詞の mediative に相当すると考えられる。なお、主語として無生物も現われうる ra-/vacc- > ra-ppinc- と異なり、ra-ppinc- の目的語は人間に限る。

9. *cəta* のほかに、共同格 *tə* が現われる場合もある。
10. Comrie 1981: 171. "nearly all the languages allowing this possibility in causative constructions are languages that otherwise allow clauses to have two accusative objects." インドの言語では Comrie が例としてあげているサンスクリットのほか、Marantz (1984) が挙げるマラーヤラム語の例のように、二重対格をとる使役構文がめずらしくない。また、Bhat (1991) は、Comrie の挙げているカンナダ語の動詞 *tinisu* 「食べさせる」について、「食べる」の目的語がない場合には、被使役動作者の対格表示も可能であるとしている。ただ、これらの対格がどのような条件で生起するかについての記述的研究は少ないように思われる。
11. これらの構文の biclausality と monoclausality については、児玉(1990)参照。なお、放任構文は動作者のない埋め込み文を許す。
12. Comrie 1981: 175.
13. 補助動詞-kun-付加による再帰動詞の派生は、語彙的に条件付けられてさまざまな機能を持ち、ある場合には項構造の減少、別の場合には項構造と関係なく主語への自己授益的 self-benefactive な行為という意味を付加する、というように、使役構造と同様かあるいはそれ以上に複雑な記述を要する形態論的過程であるが、項構造に関するものを簡単にまとめれば、削除されて減少した分の項の意味役割を、主語名詞句が担う、という項構造変化である。削除される同一指示項が対格項であれば、他動詞の自動詞化として機能する。無生物主語の自動詞も再帰動詞によって派生されるから、これらと、自己受益構文としての再帰動詞化は厳密に区別される。二項他動詞から派生する再帰動詞は、与格項を欠く再帰的な一項他動詞か、あるいは自己授益的な意味を持つ二項他動詞である。
14. 動作者が介在していることが了解され、明示されうる、という点を除けば対応する非使役他動詞を用いた文とほぼ同じ構文になることは、日本語の「させてもらう」構文とよく似ており、この構文を用いた日本語訳がほぼ適切であることも多い。ただし、「させてもらう」構文は、被使役動作者が主語に繰り上がり、使役者が「に」格で表示される構文であり、行為の結果の経験者を主語とするテルグ語の構文とは異なる。
15. たとえば *paTTu-kon-* は「掴む」という意味で、*tappu-kon-* は「(道・目標を) 誤る」という意味で、主格・対格支配の項構造をとる。この意味では、それぞれの使役構造は対格支配の項構造をもつ使役構造にもなりうる。
16. Cタイプの *vin-ipinc-* 「聞こえる」をBの *vin-* 「聞く」から直接派生する、という分析の可能性もないわけではないが、同じ動詞に対して *-ipinc* が、B>C と B>A の二つの異なる派生に関与する、ということになる。
17. Krishnamurti (1971) は、自動詞と対応する使役的他動詞に共通の特徴として、日本語の「(自動詞)-ている」「(他動詞)-てある」にも似た、テルグ語の完了(結果の継続)構文が可能である、と論じている。特に興味深いのは、自動詞であっても与格項を持つ *and-* 「着く、届く」のような動詞ではこの構文が用いられないことである。Krishnamurti は、この動詞が non-stative 「状態変化を表さない動詞」だから、としているが、与格経験者項をもつ自動詞であることに注目した分析も可能であるように見える。

[参考文献]

- Bhat, D. N. S. 1991. *Grammatical relations: the evidence against their necessity and universality*. London & New York: Routledge.
- Comrie, Bernard 1981. *Language Universals and Linguistic Typology*. Oxford: Blackwell.
- Comrie, Bernard 1985. "Causative verb formation and other verb-deriving morphology." In T. Shopen (ed.).
- Dil, Anwar S. (ed.) 1980. *Language and Linguistic Area: essays by Murray B. Emeneau*. Stanford: Stanford University Press.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) 2000. *Changing Valency*. Cambridge

- University Press.
- Emeneau, Murray B. 1971. "Dravidian and Indo-Aryan: the Indian Linguistic Area". in Sjoberg A. F. ed. *Symposium on Dravidian Civilization*. Austin and New York: Pemberton Press. reprinted in Dil, Anwar S ed. 1980.
- 児玉望 1990. 「テルグ語の句構造と主語性」『東京大学言語学論集' 89』177-187.
- Kodama, Nozomi 1997. "The Dative Case in Telugu" in Matsumura and Hayasi (eds.)
- Krishnamurti, Bh. 1961. *Telugu Verbal Bases*. Berkeley: University of California Press.
- Krishnamurti, Bh. 1971. "Causative constructions in Indian language." *Indian Linguistics* 32:18-35.
- Krishnamurti, Bh. and J. P. L. Gwynn 1985. *A Grammar of Modern Telugu* Delhi: Oxford University Press.
- Krishnamurti, Bh. 1993. "Complex Predicates in Telugu." In M. K. Verma (ed.)
- Lisker, Leigh 1963. *Spoken Telugu*. The American Council of Learned Societies.
- Matsumura, Kazuto and Hayasi, Tooru (eds.) 1997. *The Dative and Related Phenomena*. Tokyo: Hituzi.
- Masica, Colin P. 1976. *Defining A Linguistic Area*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Masica, Colin P. 1991. *Indo-Aryan Languages*. Cambridge University Press.
- Marantz, A. 1986. *On the nature of grammatical relations*. Cambridge: MIT Press.
- Shopen, Timothy (ed.) 1985. *Language typology and syntactic description III: Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge University Press.
- Subrahmanyam, P. S. 1974. *An introduction to Modern Telugu* Annamalainagar: Annamalai University Press.
- Verma, M. K. (ed.) 1993. *Complex predicates in South Asian languages*. New Delhi: Manohar.